



Osaka Gakuin University Repository

Title	Identify の反意語－ Identify という語の意味 (3) － Antonyms of the Word <i>Identify</i> : The Meaning of the Word <i>Identify</i> , Part 3
Author(s)	近松 明彦 (CHIKAMATSU AKIHIKO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 21 巻第 1 号 : 57-96
Issue Date	2010.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Identify の反意語 — Identify という語の意味 (3)—

近 松 明 彦

Antonyms of the Word *Identify*: The Meaning of the Word *Identify*, Part 3

CHIKAMATSU AKIHIKO

ABSTRACT

The aim of this article is to characterize the meaning of the word *identify*, and its antonyms. Our interest in semantic analysis originally came from a grammatical description of the English definite article, *the*. Some grammarians argue that the use of the word, *the*, is characterized by the term, *identifiability* (Huddleston and Pullum, 2002: 368). However, we thought that the description was not sufficiently clear, since the meaning of the term, *identifiability*, is not very simple. Accordingly, we started to analyze the meaning of *identify*, which is cognate with the term, *identifiability*. Here, we describe the semantic characteristics of *identify* by comparing it with those of its antonyms.

After examining several texts, we compiled a list of antonyms of *identify* as below.

- (i) a. distinguish
- b. oppose
- c. separately perceive

Upon examining lexical descriptions of these in the *Concise*

Oxford English Dictionary, and analyzing example sentences cited from some other dictionaries, we hypothesized that the words include the following semantic features:

- (ii) a. identify: [+cognition, -detachment, +involvement]
- b. separately perceive: [+cognition, +detachment, +involvement]
- c. distinguish: [+cognition, +detachment, +involvement]
- d. oppose: [0cognition, +detachment, ++involvement]

Among these, the expressions *identify*, *separately perceive*, and *distinguish*, constitute what is called the semantic field, whose members share the feature, [+cognition]. A contrast is observed within this semantic field: only the word, *identify*, includes [-detachment], whereas the other words include [+detachment]. Because of this difference, we argue that the phrase *separately perceive*, and the word *distinguish*, are antonyms of *identify*. Furthermore, the word, *oppose*, lies in some marginal area surrounding this semantic field. The feature [+/-cognition] is of little relevance when considering *oppose*. However, *oppose* shows a clear contrast with *identify* in the other features: unlike *identify*, *oppose* contains [+detachment] and [++involvement] (we previously stipulated that a feature with “++” [duplicated “+”] is observed in a more remarkable way than that with a single “+”).

The mental process represented by the word, *identify*, tends to be dependent on some similarity between the object to be identified and something else. This may remind us of the term ‘the old (or given) information’ known to scholars of functional linguistics. In other words, we need to have some background knowledge of other things in order to “identify” something. In contrast, the mental process represented by the word, *distinguish*, tends to involve differences between the object to be mentioned and the things around it. In this process, the entity to be “distinguished” is dependent on some preliminary knowledge in that the entity is compared with other things, and yet it is independent of other things to the extent that people are aware of the differences between the entity and the things around it. Here, it has to be noted that a noun phrase with the article, *the*, is generally thought to have a tendency to convey the old

information, instead of the new information. This general observation on the definite article is compatible with the idea that the use of the article, *the*, is characterized by the term *identifiability*, since the concept expressed by the word, *identify*, has a remarkable connection with the notion of the old information. In this way, we believe that our analysis of *identify* and some related words further clarifies the nature of the English definite article 'the'.

1. はじめに

本稿は、英単語 identify (「同定する」、「識別する」) の反意語を分析することを目的とする。英語における定冠詞 the の使用がどのように特徴づけられるか、ということを考える上で重要な概念として同定可能性 (identifiability) が挙げられる (例えば、Huddleston and Pullum (2002: 368) などを参照)。本稿は、このような定冠詞への関心から出発し、英単語 identify を語彙的意味論の立場に立って分析することにより、その同定可能性という概念をより適切に理解することが出来るようになるのではないかと考えている。そして、そのために特に identify の反意語の分析を通して、identify の意味的特質を明らかにしたいと考えている。¹⁾

2. 反意語の例

では、幾つかのテキストに見られる identify の反意語の例を取り上げてみることにする。

まず、次の例を見ることにする。それは、既に拙論 (2009b) で取り上げた例であるが、反意語が含まれている事例とも言えるので、それを次に引用する。²⁾

- (1) To discover a physical object is to pack in the same part of space, and fuse in one complex body, primary data like coloured form and tangible surface. Intelligence, observing these sensible qualities, identifies them in their operation although they remain for ever distinct in their sensible character.

1) identify についての辞書的記述については、本稿末尾の補注に、*Oxford English Dictionary (OED)* における identify の記述と、*Concise Oxford English Dictionary (COD)* における identify の記述を引用している。

2) 尚、次の例を含めて、以下の引用例において下線が施されている場合、その下線は、引用者 (近松) によるものである (但し、本稿でこの後出てくる、辞書からの例文の引用では、下線は引いていない)。

(Santayana, 1998: 45)

物理的対象を発見することは、色のついた外形や触れることの出来る外観のような、第一次与件を、空間の同じ部分に収納することであり、1つの複合的なまとまりの中で、融合することである。知性は、これらの現実的に知覚出来る性質を観察して、それらをそれらの作用の中で同定する。とはいえ、それらは、現実に知覚出来る性質において、永久に別個のままになっているのではあるのだけれども。

(拙訳)

ここでは、remain (for ever) distinct 「永久に別個のままになっている」という述語が、その前に見られる identifies 「同定する」と対照的に扱われている。distinct 「別個の」という形容詞は、動詞の identify とは品詞において異なるものの、語彙の意味について対照的な点があると言えよう。このことは、上の例で distinct を含む節が（国文法でいう所の）逆接の接続詞 although 「(……である) けれども」に導かれる形で identifies を含む節の中に埋め込まれていることから明らかであろう。拙論 (2009a)、(2009b)、及び本稿で論じられてきた一連の考察では既に、identify が「類似性」と関係していることを指摘していた。また、我々の類義語に関する議論 (拙論, 2009b) の中で、identify に「2つの物事を1つに重ね合わせてまとめる」といった意味があることを指摘していた。identify は、この点で distinct とは対立的であると言えよう。distinct は、「異質であること」や「分離」を意味的要素として含んでいると思われる。

次の例では、関係詞節の内部において、この distinct と語源を同じくすると考えられる動詞 is distinguished 「識別される」が、is identified と対照的な仕方で用いられている。

- (2) ... together with a survival of the first from which it is distinguished in point of existence and with which it is identified in point of character.

(Santayana, 1998: 20)

……、それ（第二の感覚—引用者）が、存在に関しては区別され、

性質の点では、同一視される、第一のものの残存と一緒に、……

(拙訳)

このように、形容詞 *distinct* と同様に、*distinguish* でも「異質性」、「分離」などが認められる。逆に、*identify* には「同質性」や、「統一」といった意味合いが備わっているのではないかと思われる。

次の例は、拙論 (2009a) において、「仲介性」に関する議論の中で引用した例だが、後続文脈に、反意語 *oppose* が見られるので、ここでも以下に引用することにする。

- (3) Mind is therefore sometimes identified with the unreal. We oppose, in an antithesis natural to thought and language, the imaginary to the true, fancy to fact, idea to thing.

(Santayana, 1998: 28)

したがって、精神は、時折、非現実的なものと同一視される。我々は、思想と言語にとって自然である対照法で、真実のものに対しては想像上のものを、事実に対しては空想を、事物に対しては観念を対立させる。

(拙訳)

この文では、*mind* 「精神」と *the unreal* 「非現実的なもの」が *identify* によって結び付けられ、一方、*oppose* 「(を) 対立させる」によって、(i) [*the imaginary* 「想像上のもの」と *the true* 「真実のもの」]、また、(ii) [*fancy* 「空想」と *fact* 「事実」]、そして、(iii) [*idea* 「観念」と *thing* 「事物」]、という3組の対について、それら各々の対を成す2つのものを対立させている。既に拙論 (2009a) の「仲介性」のところで論じたように、*identify* の用いられる状況は、仲介の働きを通して範疇形成を行うという傾向によって特徴づけられる面がある。しかし、このように見てくると、*identify* で示される過程はある範疇や類の境界を対立によって確定するのではないことがわかる。差異によって範疇の境界を確定するのではなく、

類似性や同一性によって類似物（あるいは、同一物の様々な側面）を集合させながら範疇形成を行う過程が identify の描写する過程であると言えるのではないだろうか。この仮定については、本稿におけるこれからの議論の中で改めて検討を続けることにする。

このことに関連して、separately perceive 「別々に知覚する」という表現の見られる、次のような例を見ておくことにしよう。

- (4) The meaning of "two," then, is "this after that" or "this again," where we have a simultaneous sense of two things which have been separately perceived but are identified as similar in their nature.

(Santayana, 1998: 20)

「2」の意味は、そこで、「あれの後で、これ」、あるいは、「もう一度、これ」となり、そこでは、別々に知覚されたのではあるが、それらの本質において類似しているものとして同一視される、2つの事物の同時に生じる意味を我々は手に入れるのである。

(拙訳)

上の例では、(are) identified 「同一視される」が、逆接の接続詞 but によって、その前の (have been) separately perceived 「別々に知覚された」と結合されている。つまり、両者は、両立可能ではあるが、対照的なものとして捉えられているのである。(have been) separately perceived に見られる動詞 perceive(d) そのものは、先の議論で言及された「異質性」対「同質性」、「分離」対「統一」という対立について、中立的と言ってよいであろう。そして一方 identify は、拙論 (2009b) で recognize のような認識過程を表す語と共通点があることが明らかになっていたが、それだけでなく拙論 (2009a)、拙論 (2009b) などの一連の論考の中で、知識に関わることや精神的なことに関連することも指摘されていた。一方、この点について、perceive の方は知覚の過程を示すときに使われる基本的な動詞であるから、identify とも共通点を持つと言えよう。そのように、perceive 自体は、identify と共通点が少ないのであるが、副詞の separately 「別々に」の

影響で (have been) separately perceived になると「分離」の意味が加わり、そのため (are) identified とは対照的、対立的となっている。というのも、(are) identified は「同一視される」と訳され、「統一」を意味するからである。その上、(are) identified には、as similar in their nature 「それらの本質において類似しているものとして」という類似性の表現が後続する事によって、but の右側の要素における「類似性」、「同質性」の意味合いが強まっており、but の左側に見られる「分離」、「異質性」を含んだ要素との間で、対照性の程度がさらにいっそう増す形になっている。

このように、identify は、perceive のような知覚を表す語との間で、広い意味での類義語的性質を持つ。しかし、この identify は、<統一> (あるいは、<結合>) といったような意味素性を含むため、<分離>の意味素性を含んでいる separately を付け加えられた、(have been) separately perceived との間では対立的な関係に立つのだと理解することが出来よう。以上のような、separately perceived についての分析は、本稿におけるこの後の議論の中で更に検討を続けることにする。

さて、上で見てきた例から以下のような identify の反意語の例を取り出すことが出来る。³⁾

- (5) a. distinguish ⁴⁾
- b. oppose
- c. separately perceive

この次の議論では、上の反意語のそれぞれについて、その語彙の意味を考えてみることにする。この中で、例えば、distinguish も「識別する」と訳

3) ここでのリストに挙げられた語句の選択については、exhaustive な調査によるものでなく、或る程度偶然性に左右される点があることをお断りしておく。なお、このことに関係した議論は、拙論 (2009b) の中の補説2. 「意味の場について」を参照されたい。

4) 上での議論では、形容詞の distinct についても論じられているが、identify が動詞なので、品詞を統一するために、主として動詞の distinguish を示すことにし、distinct はそれに従属するような形で扱う事にする。

されるが、identify も「識別する」と訳される場合がある。従って、両者は類義語ではなく、同義語なのではないかという反論があり得るであろう。そのような点も含め、以下の議論ではそれらの反意語と identify がどのような関係に立ち、両者がどのような体系、構造を形作っているのか、検討してゆくことにしたい。

3. 反意語の分析

3.1. separately perceive の分析

上でまとめられた反意語のうち、(5c) の separately perceived 「別々に知覚する」について更に詳しく考察してみることにしたい。この表現は、separately と perceive という2つの部分に分けて考えることができるであろう。まず、separately から考えてみることにしたいのだが、separately は、separate から派生されたと考えられるので、実際には separate の意味を最初に見ておくことにする。separate には、形容詞、動詞、名詞の用法があることが知られている。ここで、特に関係するのは形容詞的用法と思われるので、形容詞としての用法に限定して、*Concise Oxford English Dictionary* (COD) の記述を以下に引用する。⁵⁾

- (6) **separate** ■ **adj.** /ˈsep(ə)rət/ forming or viewed as a unit apart or by itself; not joined or united with others. ➤ different; distinct. ... (略) ...

(COD, p.1311)

separate ■ **形容詞** /ˈsep(ə)rət/ それだけで、もしくは、独力で、1つのユニット(単位)として、形を成している、ないし、見なされる；他とつながれる、あるいは、結合される、ということがない。
➤ 異なった；別個の。

(拙訳)

5) ここでの辞書からの引用については、改行等、レイアウト的な事柄に関して若干原典と異なった形式になっている点がある。

この記述で注目されるのは、“not joined or united with others.”「他とつながれる、あるいは、結合される、ということがない。」という説明である。このことは、identifyに見られる<仲介性>という特質とは対立的であるように思われる。この<仲介性>という考え方は、拙論（2009a）の中で、identifyの語義を特徴づける素性の1つとして提案していたものである。

- (7) identify は、2つの要素をつなぎ合わせる作用に対して用いられる傾向があり、そのような傾向を仲介性と呼ぶ。

(拙論, 2009a)

それに対して、separateはその意味的情報の主要な部分として<分離>、<独立> (<detachment>, <independence>)などの素性を含んでいるように思われる。このように、separateが、<分離>、<独立>といった意味素性を備えている事は、以下に引用する用例にもあらわれているであろう。

- (8) a. He was attacked on two separate occasions.

彼は、2度の別の時に攻撃された。

(LDCE)

- b. The gym and the sauna are in separate buildings.

その体育館とサウナ浴場は隔てられた建物にある。

(Ibid.)

また、このように<分離>、<独立>の意味を表すという性質は、separateから派生される副詞separatelyにも同様に認められる。そのことは、以下に引用する用例からも明らかであろう。⁶⁾

- (9) a. They did arrive together, but I think they left separately.

彼らは、なんと一緒に到着したのだが、私は彼らが別々に出発し

6) ここでの辞書からの引用例につけられた和訳は拙訳である。

たのだと思う。

(LDCE)

b. They were photographed separately and then as a group.

彼らは、別々に、そしてそれからグループとして、写真を写してもらった。

(OALD)

c. Last year's figures are shown separately.

昨年の数字が単独で示されている。

(Ibid.)

このうち、a-文においては、逆接の接続詞 *but* によって等位接続されている2つの節のうち、前半の節に見られる副詞 *together* 「一緒に」が後半の節の副詞 *separately* 「別々に」と対照的に用いられている。*together* と *separately* は、それぞれ [-分離]、[+分離] という素性で特徴づけることが可能であろう。また、上の b-文については、*and then* によって接続されている2つの語句、*separately* 「別々に」と *as a group* 「グループとして」を互いに対比的な仕方では理解することが可能であろう。b-文で用いられている接続のための表現 *and (then)* は、逆接でなく順接であるため、*separately* と *as a group* は、必ずしも対立的な仕方では用いられているわけではない。しかし、ある行為（ここでは撮影という行為）の2つの異なる方式を表すために、これら2つの表現が用いられていると見ることも出来る（もし、それらの2つの表現が類似した有り様を示しているのならば、この等位構造を持つ表現は、冗長なものになるはずだが、実際には、そのような冗長性は感じられないであろう）。即ち、両者の間には一定の差異が含まれていることが意識されていると言えよう。このように、b-文においてもやはり、*separately* と *as a group* はそれぞれに [+分離]、[-分離] という仕方では特徴づけることが可能になるのではないと思われる。ここで、*identify* における＜仲介性＞という特質は、[-分離]に近い性質を持つのではないと思われる。つまり、＜仲介性＞とは、[-分離]をそれ自体の内に含むような素性なのではないか、といった可能性も或る程度考

えることが出来るであろうと思われる。

次に、上の反意語リストに見られる *separately perceive* 「別々に知覚する」を構成する2語のうちの後半のもの、即ち、*perceive* 「知覚する」について考えることにする。*COD* に見られる *perceive* についての記述を以下に引用することにする。⁷⁾

- (10) **perceive** ■ v. 1 become aware or conscious of. 2 regard as.

(*COD*, p.1063)

perceive ■ 動詞 1 に気づく、あるいは、意識するようになる。2 と見なす。

(拙訳)

このことは、拙論 (2009b) の中で、*identify* の主要な類義語の1つとして、*recognize* 「認める」を取り上げていたことを思い起こさせるであろう。*perceive* 「気づく」と *recognize* 「認める」は、互いに同義語的な関係にあるとは言えないであろうが、いずれも共に人間の認知的過程の基本領域と深く関係する事柄を表わしているという事が出来るであろう。そのようなことから、両者が共に<認知> (<cognition>) という素性で特徴づけられる可能性を持つと考えられよう。

また、*perceive* は、*identify* と対立するどころか、それと近い意味を持つ面さえある。*Oxford English Dictionary (OED)* における *identify* についての記述を見ると、その中に以下のような箇所が見られる。

- (11) To discover, perceive; to localize. *colloq.*

(*OED, Identify, 3*)

発見すること、知覚すること、特定の場所に範囲を限ること。口語。

(拙訳)

7) 但し、DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源 [起源]) は、省略する。

これを見ると、identify そのものが、perceive 「気づく」に近い意味を持つ事がわかる。このように、identify と perceive が近い意味を持つということは、上での議論の中で、perceive を主要部とする表現 *separately perceive* 「別々に知覚する」を identify の反意語リストに加えたことと矛盾しているように見えるかもしれない。しかし、その場合の perceive は、それだけ単独で identify の反意語リストに現れているわけではなく、*separately* を伴って現れているのである。*separately perceive* 中の perceive 自体は、identify の持つ意味情報の（少なくとも）ある部分と共通した意味素性を持つのであるから、*separately perceive* を identify の反意語としている要素は、主として *separately* であろうと推定される。

以上のことから、identify と *separately perceive* が、次のような、素性を持つものとして理解することができるであろう。

- (12) a. identify: [+ 認知, - 分離] ([+cognition, -detachment])
 b. *separately perceive*: [+ 認知, + 分離] ([+cognition, +detachment])

即ち、<認知>という素性に関しては、identify にせよ、*separately perceive* にせよ、いずれも、[+ 認知] という素性を共通して持つ。それに対し、<分離>素性について言えば、identify は [- 分離] を持ち、*separately perceive* は [+ 分離] を持つ。identify と *separately perceive* の関係については、概ね以上のようにまとめることができるであろう。

N.B.

上の議論の中で、perceive と recognize を、いずれも<認知>という素性を持つという点で、類似した意味を表す語としていた点に関して、もう少し詳しく論じておく方がよいであろう。COD では、recognize が次のように記述されている。⁸⁾

8) DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源 [起源]) は、省略している。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して若干原典と異なった形式になっている点がある。

- (i) **recognize or recognise** ■ **v.** 1 identify as already known; know again.
 ➤ (of a computer or other device) identify and respond correctly to (a sound, character, etc.). 2 acknowledge the existence, validity, or legality of. ➤ formally acknowledge that (a country or government) is eligible to be dealt with as a member of the international community. 3 reward formally. 4 (of a person chairing a meeting or debate) call on (someone) to speak.

(COD, p.1201)

recognize あるいは **recognise** ■ **動詞** 1 既に知られたものとして認定する；再び知る。

➤ (計算機、あるいは、その他の装置について) (ある音、文字 (character)、等) を同定 (identify) し、(それ) に対して正確に反応する。2 ~の存在、妥当性、あるいは、合法性を認める。➤ (国家、あるいは、政府が) 国際社会 (international community) の一員として扱われる資格があると正式に承認する。3 正式に報いる。4 (ある会合、あるいは、討論の議長を務めている人物について) (ある人に) 発言することを求める。

(拙訳)

上の記述では、「既に知られたものとして認定する；再び知る。」(identify as already known; know again.) (COD, p.1201) などの記述に見られるように、既知の情報を参照するという意味的特質などが示されている。このようなことから、perceive の示す過程と比べて、recognize の示す過程の方がより複雑化していることがわかる。perceive は、「に気づく、あるいは、意識するようになる」(become aware or conscious of) (COD, p.1063) といった仕方で、語義の説明がなされている。

それでは、上での議論のように、recognize と perceive が近い意味を持つと見做すことは、正しくないのであろうか。この点については、<認知>という素性を持つ語として定義される範疇に、recognize、perceive という、これら両方の語が属すると考えてみても、特に問題はないと思われる。し

たがって、広い意味でこれら両方の語が意味の上で近い成分を、一部共有すると言ってもさしつかえないであろう。次に、上での議論で見たように、recognize にせよ、perceive にせよ、identify の辞書的語義説明の中で、identify を言いかえる語として用いられている。そのようなことから言っても、recognize と perceive は、広い意味ではやはり identify の類義語であると言えよう。

このように、上での議論に関係する限りでは、recognize と perceive は、ともに<認知>という素性を共有し、大きく言って意味的に近い性質を持つ語として扱う事ができると考える。

3.2. distinguish の分析

では次に、動詞 distinguish 「識別する」と形容詞の distinct 「別個の」について見ることにする。distinguish も「識別する」と訳されるが、identify も「識別する」と訳される場合がある。それなら、両者は反意語ではなく、同義語なのではないだろうか。しかし、本稿の分析では、両者を反意語として扱っている。では、どのような点に対立があるのだろうか。ここでは先ず、動詞 distinguish についての COD の記述を以下に引用することにする。⁹⁾

- (13) **distinguish** /di'stɪŋɡwɪʃ/ ■ **v.** 1 recognize, show, or treat as different. ➤ (distinguish between) perceive or point out a difference between. ➤ [often as adj. **distinguishing**] be an identifying characteristic of. 2 manage to discern (something barely perceptible). 3 (**distinguish oneself**) make oneself worthy of respect.

(COD, p.416)

distinguish /di'stɪŋɡwɪʃ/ ■ **動詞** 1 異なったものとして認める、示す、あるいは、扱う。➤ (**distinguish between**) の間の相違を知覚する、もしくは、指摘する。➤ [しばしば、形容詞 **distinguishing** として] の確認するような特質である。2 (かろうじて知覚可能であ

9) DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源 [起源]) は、省略している。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して若干原典と異なった形式になっている点がある。

るような、何かあるものを) どうにか見分ける。3 (*distinguish oneself*) 自分自身を尊敬に足るものとする。

(拙訳)

以上の *distinguish* の意味に関する記述を見ると、相違点や差異に注目する意味説明が目立つように思われる(例えば、「異なったものとして認める、示す、あるいは、扱う。」など)。また、「の確認するような特質である。」といった説明に見られるように、*distinguish* が特徴記述の意味を表わす場合があるのだが、おそらくは、差異、相違の意味との関連から言って、同じ特徴記述でも比較される他の事物、人物などとの差異によって、或る対象の特質を浮かび上がらせる、という性質が強いのではないかと推察されるであろう。いわば、境界を確定し、輪郭を明確にするような特徴記述の仕方が予想されるであろう。しかし、ここで注目されるのは、そのような違いに対する意識という事だけではない。そのほか、目立った点として、知覚、認識など、認知的過程に関係する表現が見られることをやはり挙げなくてはならないであろう。先に引用した語義説明には、“recognize, show, or treat as different.” (*COD*, p.416) 「異なったものとして認める、示す、あるいは、扱う。」のように、*recognize* 「認める」などの表現が見られる。また、“perceive or point out a difference between.” (*COD*, p.416) 「の間の相違を知覚する、もしくは、指摘する。」のように、*perceive* 「知覚する」などの言いまわしも、その語義説明に見られる。このように、知覚、認識などの認知的過程に関係する要素が、*distinguish* の語によって示される過程に含まれる場合があり得ると見ることができるであろう。

以上の議論の中で見てきたように、*distinguish* には、差異、相違を通して行われる知覚、認識等の認知的過程を表わす語としての性格が認められるのではないと思われる。この特質は、以下に示すように、*Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE)* からの引用例でも確かめられる。¹⁰⁾

10) ここでの辞書からの引用例につけられた和訳は拙訳である。

- (14) His attorney argued that Cope could not distinguish between right and wrong.

弁護士は、コープが正しいことと間違っただけを区別することができないのだと主張した。

(LDCE)

- (15) The factor that distinguishes this company from the competition is customer service.

この会社を競争相手から区別する要素は、カスタマー・サービス（顧客サービス）である。

(Ibid.)

これらの例を見て、先ず一種の認知的過程が描かれていることが分かるであろう。今、引用した例のうち、上の例では明らかに認知的な事柄への言及（具体的には、善悪の判断への言及）が見られる。下の例でも、一種の識別（具体的には、或る企業とその競争相手の企業の識別）と言う、広い意味ではやはり認知的過程の一種と言えものについて語られている。また、今、引用した2つの例では、差異、相違への注目が観察される。上の例では、善悪の別が問題となっており、下の例では、互いに競合関係にある会社間の相違が問題となっている。このように用例の中で注目されている差異、相違は、広い意味で<分離>にかかわるであろう。

上での議論をまとめると、distinguish は、大きく言って<認知>と<分離>という意味素性を含む可能性を持つと考えて差しつかえないということになるだろう。

以上のように、distinguish に<認知>という素性と<分離>という素性が認められるという事は、次の *Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD)* からの引用についても、明らかに当てはまるように思われる。¹¹⁾

11) 以下の *OALD* からの引用について、和訳は拙訳である。

- (16) It was hard to distinguish one twin from the other.

一方の双子をもう一方の双子と見分けることは難しかった。

(OALD)

- (17) Sometimes reality and fantasy are hard to distinguish.

時として、現実と空想は区別しがたいものだ。

(Ibid.)

- (18) What was it that distinguished her from her classmates?

彼女を同級生から区別する目安となるものは何だったのか。

(Ibid.)

これらの例において、2人の異なる双生児、また、現実と空想、あるいは、ある女子生徒とその同級生など、それぞれ対を成す存在が見られる。では、それらの対を成す存在を同一視することはできるであろうか。それらは同一視できないであろう。そして、上の例の distinguish はその点で<分離>という素性を持つと考えることができるであろう。また、そのような過程（異なる2人の人物、あるいは、異なる2つの事物を同一視せずに、分離して捉える過程）は、何らかの認知的な過程であると言えるであろう。その意味で、distinguish には、<認知>という素性が含まれていると考えるべきであろうと思われる。

以上のような distinguish と identify の対立について、もう少し検討しておくことにしたい。例えば次のような例では、distinguish が識別・特定の過程を表わしているという意味で、identify と似た仕方で用いられており、その点で、distinguish が identify に対して反意語的であるという特性は中和されているように見えるかもしれない。

- (19) I could not distinguish her words, but she sounded agitated.

私は彼女の言葉をはっきり認める事ができなかったが、彼女は、聞いたところ、興奮しているようであった。¹²⁾

(OALD)

この例では、distinguish が一種の識別、確認、あるいは、特定といった意味を表わしているという点で、identify と似ているであろう。しかし、上で論じてきたこと (identify が<分離>と<認知>によって特徴づけられるということ) を考えると、identify と distinguish が同じ識別、確認の意味を持つとしても、それぞれの語によって示される識別、確認の仕方に違いがあるのではないかということが推測されるであろう。identify であれば、ある物事 (あるいは、人物など) を認める際に、おそらくは問題とするものが既知の何か或るものと共通していることに基づきつつ、それを認める、といったことが行われるものと思われる。しかし、この例で用いられている、distinguish の場合には、あるものごと (あるいは、或る人) を、(相違点に重点を置きつつ) その他のものから分離するような格好で、そのものごと (あるいは、その人物) を認め、それを理解することになるのだろうと考えられる。具体的に言えば、この例の場合は周囲のある一定の状況の中で、問題となっている女性の言葉だけを取り出して聴き取ることを ([但し、文全体で言えば、この例は否定文なので] 聴き取ることができなかったことを) 表わしているのであろうと考えられる。

以上のことに関連して、次に distinguish と語源的に関係している形容詞 distinct についても触れておくことにする。以下に、COD から形容詞 distinct についての記述を引用する。¹³⁾

(20) **distinct** ■ **adj.** 1 recognizably different in nature; individual or separate.

2 readily distinguishable by the senses: *a distinct smell of nicotine.*

(COD, p.416)

distinct ■ **形容詞** 1 実際に、認識可能な仕方で異なっている; 個々の、あるいは、別々の。2 感覚によって容易に区別できる: *a*

12) この例文の和訳は拙訳。

13) DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源 [起源]) は、省略している。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して若干原典と異なっている点がある。

distinct smell of nicotine 「ニコチンのはっきりした臭い」

(拙訳)

ここでも、差異、相違が目立つような仕方で、意味の説明がなされているように思われる。individual「個々の」、あるいは、separate「別々の」といったように、〈分離〉、〈独立〉という意味素性の当てはまる意味説明が見られる。このことは、separately perceive「別々に知覚する」がidentifyと反意語の関係にあるという、上で見た事実を思い起こさせるであろう。ここで考察しているdistinct、distinguishも、identifyの反意語なのであるから、distinct、distinguishが、separately perceiveに対して類義語的な関係にあることを予想することができるであろう。

ここでは、品詞の違いについて敢えて厳密に扱うという事をしてこなかったが、品詞について考慮するならば、distinguishが動詞であるのに対して、distinctは形容詞である。その点で、distinctは、動詞を中心とするフレーズであるseparately perceiveと対応しているわけではなく、また、副詞であるseparatelyに対応しているわけでもない。強いて言えば、同じく形容詞であるseparateを想定する場合に、それと対応していると見るべきであろう。そして、separately perceiveと類義語的關係にあるのは、(distinctでなく)distinguishであると考えべきであろう。そのようなことを考慮して、ここではseparately perceiveが動詞distinguishと類義語的に対応すると考えることにする。その場合、形容詞distinctは、separateに対応して、もっぱら〈分離〉の意味だけを持ち、perceiveに対応する知覚を意味する要素は欠如しているという可能性が考えられるであろう。即ち、次のような関係が成り立つのではないかと思われる。

(21) a. distinguish ≐ separately perceive

b. distinct ≐ separate

しかし、そうであるからと言って、distinctが認知的な要素を完全に欠いていると言いきることはできないであろう。上に引用した辞書における

distinct に関する記述 (COD, p.416) では、「感覚によって容易に区別できる」(readily distinguishable by the senses) などのように、或る種の認知的過程に関係した特性への言及が見られる。このように、distinct にも認知に関係する要素が、或る程度は含まれていると見る事が出来るであろう。

それでは、認知的なものだけを挙げれば、それだけで distinct の意味を特徴づける要素をすべて枚挙したことになるのであろうか。この点については、上でも指摘したように、〈分離〉、〈独立〉といった素性を、あわせて考えることが必要になるのではないかと思われる。同じ知覚、認識に類する認知的過程であっても、上に引用した COD における distinct の記述では、もっぱら差異に基づく認識可能性に関することが述べられていると理解することが出来るであろう。つまり、distinct についてのこの意味記述は、他との類似点、共通点に基づく同定に言及しているのではなく、他との相違による認定の可能性に言及しているように思われる。ここで、差異、相違が、〈分離〉、〈独立〉の特別な場合であると見なすならば、distinct には、やはり、〈認知〉という素性と〈分離〉、〈独立〉という素性が含まれているのではないかと推察して差し支えないのではないだろうか。¹⁴⁾

このように、distinct、distinguish の表わす意味は、〈認知〉と〈分離〉という素性によって、その意味領域の重要な部分を概ね特徴づけることができるのではないかと思われる。この事に関連して、先の議論の中で、identify と separately perceive について、素性分析 (二項対立的な素性分析) を行っていたことを思い起こそう。先の分析では、separately perceive という表現の持つ意味についての議論の中で、separately perceive も、identify も、共に [+ 認知] という素性を備えているとしていた。一方、

14) なお、distinct、separate の類義語としての individual 「個々の」に関して述べておく。

上に引用した distinct に関する辞書の記述 (COD, p.416) に従えば (本稿 (20) を参照)、separate は、individual ととも類義語的な扱いを受けていると言えよう。換言すれば、identify は、(品詞が異なりはするが) individual ととも、意味的に概ね対立的な関係にあるということがわかるであろう。このようなことから、identify の反意語に、〈分離〉、〈独立〉の意味が見られるとする方がより妥当であると言えよう。

<分離>については、separately perceive が [+分離]、identify が [-分離] という素性を持っていると我々は分析しているのであった。そのようなこととの関連について言えば、ここで今見てきた distinct、distinguish は、[+認知] という素性を持つという点で、identify や separately perceive と共通していると言える。しかし、[+分離] であるという点で、distinct、distinguish は、separately perceive とは共通しており、他方、identify とは対立している。

上で論じてきた事をまとめると、次のように表わすことが出来るであろう。

- (22) a. identify: [+認知, -分離] ([+cognition, -detachment])
 b. separately perceive: [+認知, +分離] ([+cognition, +detachment])
 c. distinguish: [+認知, +分離] ([+cognition, +detachment])

既に指摘したように、identify も「識別する」と訳され、distinguish も「識別する」と訳される。このように両者は互いに類義語のような性格を持つかもしれない。しかし、それらの間には、識別方式に相違がある。素性 [-分離] を持つ identify によって示される過程は、他のものとの共通性によって或る対象が捉えられる過程であると考えられる。それに対し、[+分離] を持つ distinguish によって示される過程は、他のものとの差異によって、他のものから切り取られるかのようにして、或る対象が捉えられる過程である。そのような違いが両者の間にはあるのではないかと推察されるであろう。このような識別方式の相違は、地理的位置の把握・定義の方式の違いに譬えることができるかもしれない。或る地理的領域を定義しようとする場合、その中心地によってその領域の大体の位置を把握することができるであろう。しかしまた、その境界によってその領域を定義することが必要になることもあるであろう。このような地理上の位置についての定義方式の違いにも相当する相違が、identify と distinguish の間には見られると言えよう。

3.3. oppose の分析

それでは、先に挙げた identify の反意語のリストから、oppose を取り上げることにする。COD に見られる oppose についての記述を以下に引用する。¹⁵⁾

- (23) **oppose** ■ **v.** 1 (also **be opposed to**) disapprove of, resist, or be hostile to. ► compete with or fight. 2 [as adj. **opposed**] (of two or more things) contrasting or conflicting. 3 [as adj. **opposing**] opposite.

(COD, p.1003)

oppose ■ **動詞** 1 (また、**be opposed to** も) に不賛成である、に抵抗する、あるいは、敵対している。►と競争する、あるいは、戦う。2 [形容詞 **opposed** として](2つ、もしくは、それより多くの物事について) 対比している、または、相争っている。3 [形容詞 **opposing** として] 反対側の。

主な意味として、不賛成、抵抗、敵対、競争、戦闘などを思わせる表現が示されており、いわば、〈不一致〉、〈敵対〉などの概念が oppose の表わす意味に含まれていることが推察される。先に見てきた identify の反意語の分析では、〈分離〉という意味素性の存在が観察されたが、ここでもそれが関わることが予想される。〈一致〉は [+一致] という仕方で、また、〈不一致〉は、[-一致] という仕方で表現することが可能であろう。ここで、〈一致〉は〈分離〉の反対の概念を表わしていると考えられるであろう。このように考えると、少なくとも近似的には、〈一致〉を [-分離] の一種、〈不一致〉を [+分離] の一種と見なすことが可能であるかもしれない。

しかし一方で、抵抗、戦闘などのような概念に見られる素性である〈敵対〉は、敵対する対象から遠ざかるのではなく、その対象へ向かう運動を

15) DERIVATIVES (派生語)、ORIGIN (語源 [起源]) は、省略している。また、改行等、レイアウト的な事柄に関して若干原典と異なった形式になっている点がある。

暗示すると考えられる。したがって、その意味では、素性<敵対>は[+分離]とは相いれないように思われる(この点で、[+分離]は、「敗走」などの語を連想させるであろう)。ところが、<敵対>は、その敵対の対象へ向かう運動を暗示するからと言って、敵対関係が持続する限りにおいて、その対象と融合することはない。そのようなことから、oppose はやはり素性[+分離]を持つとした方が良いようにも思われる。oppose によって示される過程は、([+分離]という要素を保ちながらも)敵対する対象への(緊張感を伴った)積極的関与、あるいは、積極的参加が認められる。そうすると、oppose は、素性[+分離]を持つと同時に、それとは、一見対立的とも思える関与、参加の意味を含むと考えるのが良いのではないかと思われる。oppose はいわば融合することなく、分離したままの状態を保ちながら、それでいて退却や逃走を行うことなしに、緊張感を持ちつつ、対象へ向けて積極的に関わろうとする様子を表わしていると考えべきであろう。このように、oppose は、[+参加]といった素性をも備えていると仮定することが合理的なのではないかと考えられる。

一方、上での議論では、identify の反意語に<認知>という素性が関係していることを見てきたが、この点で、oppose はどうであろうか。oppose の場合には、このようなく<認知>という要素の関係する可能性は低いのではないかと思われる。oppose の語義の説明に関係する、「不賛成」、「抵抗」、「敵対」、「競争」、「戦闘」などといった概念は、どちらかと言えば、対人的、行動的な要素を含むように思われるからである。無論、人間は対人的な面でも何らかの精神活動を営むと考えられ、また、ある人の(意識されている)行動がその人の精神によって制御される以上、対人的なことであっても、また、行動的な事であっても、認知的な要素を全く欠くとは言えないであろう。しかし、少なくとも、<認知>という素性だけが目立って積極的に働いていると言う事も出来ないように思われる。

以上の事から、oppose は、<認知>という素性については、「関与しない」という意味で、正でも負でもない0という値を取り(つまり、素性[0認知]を有し)、また、<分離>という素性については、[+分離]を持っているように思われる。しかし、既に論じたように、oppose は[+分

離] だけでなく、[+参加] という素性をも抱き合わせ的に備えているものと思われる。

以上は主として、COD における辞書的記述に基づきながら、筆者の内省によって行われた概念分析の結果であるが、そのことは、その他の辞書から引用される用例によっても支持されることと思われる。¹⁶⁾

(24) Congress is continuing to oppose the President's healthcare budget.

国会は大統領の医療関連予算に反対し続けている。¹⁷⁾

(LDCE)

上の例で、議会と大統領の間で意見の一致（[-分離] に相当）が成立していると言えるであろうか。議会予算案には反対なのだから、意見の一致が成り立っているとは言えないであろう。つまり、[+分離] であると言える。次に、素性 [+分離] が見られるのであるのなら、国会は大統領の予算案に対して「分離する姿勢」、言い換えれば、遠ざかる姿勢をとっているであろうか。もしここで言う、「分離する姿勢」を取っているのであれば、国会は無関心であるか、あるいは、消極的な態度を取っているということになるかもしれない。もしそうであるとすれば、無関心であったり、消極的であったりするという意味で、oppose が [-参加] という素性を持つと考えるべきなのではないだろうか。しかし、実際のところ、そのように oppose が [-参加] を持つと考えることは困難と思われる。というのも、この文では積極的な反対の言動が描かれていると考えられるからである。そのようなことから、この場合の oppose は素性 [+参加] を持つと考える必要があるであろう。つまり、oppose は、[+分離] という素性を持ちながら、一方で、[+参加] という素性をも有していると考えるのが適当であろう。

16) 筆者は英語の母語話者ではなく、本稿での分析では、主として、いわゆる言語分析よりも、むしろ概念分析と呼ぶべきものに重点を置くことを試みようとした。

17) ここでの和訳は拙訳である。

では、次の例はどうであろうか。

(25) He is opposed by two other candidates.

彼は、他の2人の候補者から対抗相手とされている。¹⁸⁾

(LDCE)

この例の中で、主語 he の指示する男性は、他の2人の候補者 (two other candidates) と立場等、一致しているであろうか。この例が、仮に選挙運動などについての文であると仮定するなら、このような場合は一般に、幾つかの重要な点について、自己の立場を明確にすることが必要になったり、また、競争者との対立点を明らかにすることが必要になったりする場合が多いのではないと思われる。少なくとも何らかの重要な点で、ある種の不一致があると考えられる。また、「切磋琢磨する」という日本語で表現されるような、競合と或る種の協調が建設的に両立するような状況も、確かにあり得るであろう。しかし一般的には、対抗相手との或る種の協力は、倫理的に問題視される場合が少なからず有り得るのではないだろうか。このようなことから、主語 he の指示する男性と、他の2名の候補者の間の関係には、ある種の緊張関係があると言う事が出来るであろうし、そのような緊張関係には、〈分離〉という要素が (少なくとも何らかの程度) 含まれていると解釈することが可能であると言えよう。そして、そのような〈分離〉の素性を含む関係が oppose によって示されていると考えることができる。

次に、上の例 (“He is opposed by two other candidates.” (LDCE)) で主語 he の示す人物と他の2名の候補者が互いに無関係になる可能性について考えてみることにする。oppose は〈分離〉という素性を持つのであるから、そのことから、主語 he の示す人物と他の2名の候補者が相互に無関係な方向に進んでゆくのではないだろうか。しかし、上の例を見ると、そのようなことが言えないことがわかる。というのも、他の2人の候補者は、

18) この例文の和訳は拙訳である。

主語 he によって示される人物に対して、競合的な関係に立っているという点で、その人たちは、(少なくとも当面は) 無関係であるとは言えないからである。言い換えれば、両方の側が同一の競争に参加していると考えられるのである。例えば、選挙運動であれば、同じポストを巡って互いに競い合うという関係がある。したがって、oppose が [-参加] という素性を持つということは言えないであろう。つまり、oppose は、素性 [+参加] を持つと考えることが適切であると考えられる。結果として、上の oppose の例に描かれているような緊張関係は [+分離] と [+参加] という2つの素性によって特徴づけることができるということになるであろう。

上で見た2つの例は、いずれも、多かれ少なかれ政治的文脈に埋め込まれるべき用例と思われる。これらの例が示すように、oppose には、より対人的、社会的な意味合いが含まれる傾向があると考えられ、<認知>という素性が余り積極的に関与しているとは考え難い点があるように思われる。やや単純化して言えば、対人的要素が強い分だけ個人の内的な過程を示している度合いが低くなるというトレードオフの関係があるように見える。その点で、oppose は、[0 認知] という素性を持つと言えよう。

それでは、oppose は、社会的、政治的な文脈に特有の表現と考えるべきなのであろうか。この点について、そうであると断定することは出来ないように思われる。次の例は、政治的文脈からの引用ではなく、哲学書の一節から引用したものである。

- (26) I should not mention this, but for the fact that it throws so much sidelight upon that rationalistic temper to which I have opposed the temper of pragmatism.

(James, W., 1995: 26)

このようなことを取りたてていうのは、それが事実上、私がプラグマティズムの気質と対立するものとした合理論的気質をたまたま間接的に明らかにしてくれるからにほかならない。

(ジェイムズ, 梶田 (訳), 1998: 55)

ここで oppose(d) によって示されている対立は、「プラグマティズムの気質」と「合理論的気質」の間の対立である。それらは、思想に見られる違いであり、政治的、対人的であるよりは、精神的な対立であろう。その意味では、認知的な領域に近い部分について述べられているのだと考えることも出来るかもしれない。確かに、「気質」(temper) は、一種の精神状態などを指すであろうと思われる。しかし、このような気質の対立を、より社会的、対人的な仕方では解釈することもできないわけではない。この対立を、或る気質を持つ人々と、それとは異なる別の或る気質を持つ人々との対立ということに近い角度から捉えることも可能なのではないかと考えられるのである。無論、上の文は、完全に社会的観点から述べられているのではなく、恐らくは哲学的原理を抜きにしては成り立たないであろうと考えられるのではあるが、しかしながら、人間と人間の対比に近いものを考えながら、気質の対比を理解するという社会的観点からの解釈も、ある程度までは考えられ得るのではないと思われるのである。上での議論の中で、oppose には<認知>という素性が積極的には関与しないという性質があると論じてきた。つまり、oppose は、[+/- 認知] という対立について、中立的ということになるのではないと思われる。上の哲学的文脈からの用例などでは、oppose が精神的な過程を表わしているとするべきではあるが、また、一種の社会的な情勢を表わしているという一面も否定し得ないであろう。即ち、上の例には、oppose が [0 認知] という素性を持つという性質が表れていると見る事ができるであろう。

また、上の例では、「プラグマティズムの気質」と「合理論的気質」の間の対立が描かれているのであるから、両者には意見の一致ではなく、いわば一種の「分離」が見られると言うべきであろう。そこには、oppose の持つ<分離>という素性が反映しているのだと理解することが出来るのではないだろうか。次に、「プラグマティズムの気質」と「合理論的気質」に「分離」の要素が見られるからといって、両者は完全に無関係であると考えべきであろうか。そのように考えることはできないであろう。両者が相互に無関係であれば、上の用例の which 関係詞節、即ち、to which I have opposed the temper of pragmatism (James, 1995) 「私がプラグマ

ティズムの気質と対立するものとした」(榊田(訳), 1998) という箇所が、不要になるはずではないだろうか。というのも、もし無関係な説明を取って付け加えれば、唐突で奇異な印象を与えることになるはずだからである。無関係な説明であるなら、通常、そのような説明を付け加えることは最初から行われまいであろう。実は、両者は無関係ではない。oppose は、積極的な関与、参加の意味を含んでいる。実際、プラグマティズムと合理論が多くて互いに対立することは、一般に知られているであろう。しかし、これらの2つの立場は、対立的ではあるものの、いわば、同じ対立の構図の中に共に存在しているとも見なされ得るであろう。その意味で、互いに無関係とは言えない状態にある。したがって、oppose は、[+参加] という素性を含んでいると考えられる。

以上の事から、oppose は次のような素性を持つと考えられる。

(27) oppose:

[0 認知, +分離, +参加] ([0 cognition, +detachment, +involvement])

そうすると、先に記述してきた identify とその反意語の素性分析に、[+/-参加] を加える必要が出てくる。identify の場合、同定する対象への関与、参加は、ないわけではない。しかし、それはさほど積極的な関与とは言えないように思われる。oppose の場合であれば、<参加>という素性を明示することなしには、基本的な意味記述を十分に行うことが難しいのではないかとと思われる。それに対して、identify の場合には、それほどまでに必要性の高い仕方では<参加>という素性が関わっているとは、言えないように思われる。そのようなことから言えば、identify は、<参加>素性について、関与せず中立的であるという意味で、[0参加] という素性を持つのではないかとと思われる。しかし、そうであるからと言って、identify の語が適用される状況において、もし同一視されるべき2つのものの間に相互の関与が完全に欠如しているのであるならば、identify の語によって記述される同一視の過程自体、成立困難になるのではないかとと思われる。2つのものごとの同一視自体が関与の一種として理解されるから

である。つまり、identify が素性 [0 参加] を持つという分析には、行き過ぎがあるのではないかとも思われるのである。

そのようなことを考慮して、identify の素性分析との間で整合性を保つことができるようにするために、上の oppose の素性分析について、単に <参加> の有無が見られるようにするのではなく、参加の程度が高いか、低いかということが見られるように改めるべきなのではないかと考える。即ち、次のように改訂することを提案することにする。

(28) oppose:

[0 認知, +分離, ++参加] ([0 cognition, +detachment, ++involvement])

このように、oppose の素性行列の中で、[+/-参加] の素性を、[++参加] のような形式にして、「高参加」（参加における積極性の度合いが高いということの意味する、本稿における造語）といった概念を表現できるようにすると良いのではないかと思われる。次に、identify についても、従来から用いられている [+参加] という形式を用いることによって、「『高参加』ではないものの、一定の参加が見られる」ということを表わすことができるであろう。その場合、今度は identify の素性分析を次のように示すことになるであろう。

(29) identify:

[+認知, -分離, +参加] ([+cognition, -detachment, +involvement])

それでは引き続いて、distinguish について考えてみることにする。「識別する」、「区別する」という場合、本来、(完全な同一性を持つわけではないが) 一定の類似性が認められるということが前提されていることが多いのではないだろうか。一般的に言って、特に識別へ向けて意識的努力が行われるのは、識別の努力を意識的に行うのでない限り、何らかの混同が起りかねないといった情勢にある場合が多いのではないかと思われる。したがって、distinguish が用いられる場合に、識別される2つのものごと

は、潜在的に何らかの類似性や、あるいは、少なくとも何らかのつながりの存在がかかわっているのではないかと推測されることになるであろう。その点で、両者は無関係でなく、それらの間には互いに一定の関与が見られるはずであると言えよう。このように、distinguish は [+参加] を持つと考えることが可能であろう。とは言え、そのような関与は、今も触れたように潜在的な形で存在することが推測される程度のものであるから、さほど強力なものではないであろう。上で用いた表現を使えば、distinguish には、一定の「参加」は認められるが、「高参加」ではない、ということになるであろう。distinguish は、[+/-参加] の素性に関しては、[+参加] という形を取ると考えるのが適当であり、[++参加] といった形を取ると考えることは困難であろう。このようにして、distinguish の素性分析は、次に示されるようなものとなるであろう。

(30) distinguish:

[+ 認知, + 分離, + 参加] ([+cognition, +detachment, +involvement])

最後に、separately perceive について考えてみることにする。上に引用した用例 “a simultaneous sense of two things which have been separately perceived but are identified as similar in their nature.” (Santayana, 1998: 20) 「別々に知覚されたのではあるが、それらの本質において類似しているものとして、同一視される、2つの事物の同時に生じる意味を」に立ちかえてみよう。ここで問題となっている2つの事物は、別々に知覚されるのであるから、一言でいえば無関係であろう。ただし、それらが同一視されることが直後に述べられており、その点でそれら2つの事物は潜在的な同一視の可能性へ向けて開かれているとも言えるであろう。have been separately perceived 「別々に知覚された」自体にも、潜在的には（その意味上の主語の指す複数の事物が）同一視される可能性を閉ざしてはおらず、換言すれば、（それら事物間相互の）関与の可能性を残していると言えるであろう。このように、separately perceive も、解釈次第で、[0参加] ~ [+参加] といった、揺れのある素性の値の取り方を示しているように思われるが、やや単

純化して言えば、「一定の『参加』は認められるが、『高参加』ではない」という意味で、やはり ([++参加] ではなく) [+参加] という素性を持つと考えてよいであろう。そうすると、separately perceive の素性分析の結果は、概ね以下のように示すことができるであろう。

(31) separately perceive:

[+認知, +分離, +参加] ([+cognition, +detachment, +involvement])

以上の議論をまとめると、identify とその反意語の素性分析は、概ね以下のようにまとめることができるであろう。

(32) a. identify:

[+認知, -分離, +参加] ([+cognition, -detachment, +involvement])

b. separately perceive:

[+認知, +分離, +参加] ([+cognition, +detachment, +involvement])

c. distinguish:

[+認知, +分離, +参加] ([+cognition, +detachment, +involvement])

d. oppose:

[0 認知, +分離, ++参加] ([0 cognition, +detachment, ++involvement])

4. 反意語についてのまとめ

これまでの議論の中で、identify の反意語の例を挙げ、その意味素性について分析をしてきた。そしてその過程で、素性 [-分離] を有するという特質によって identify が特徴づけられることを見てきた。そのほか、identify が [+認知] といった意味素性を持つ事が確認され、更に、identify の反意語のうち、separately perceive や、distinct、distinguish などのように、[+認知] という素性を identify と共有する語句が少なくない事なども明らかになった。このような [+認知] 素性を共有する語句として、identify が separately perceive、distinguish などと共に同じ意味の場 (semantic

field) を形成し、その中で、素性として [-分離] を有する語である identify が他の語 (即ち、[+分離] を持つ語) に対する反意語として対立するという構図が明らかになったのではないと思われる。しかし、そのような意味場の周辺領域には、oppose のような語があることも忘れてはならないであろう。oppose は、素性 [0 認知] を持つなど、identify との意味素性の共通点が余り多くはないのだが、それでいてなお、素性 [+/-分離] に関する対立の為に、また、(oppose の側に見られる) 素性 [++参加] などの影響の為に、時として identify との対立が鋭く意識される場合がある。このようにして、oppose も identify の反意語と見なすことができる。

identify に見られる素性 [-分離] は、上でも指摘したように、仲介性 (即ち、2つの要素をつなぎ合わせる作用に対して用いられるという、identify に見られる傾向 [拙論 (2009a) を参照]) と非常に近い関係にあるのではないかと考えられる。おそらく1つの可能性としては、<仲介性>という素性自体、素性の集合であるような一種の複合的素性であって、[-分離] をその主要成分とする素性行列 (feature matrix) によって示し得るという仮説が考えられるであろう。そのため、<仲介性>については更なる分析の余地があり得るかもしれない。この点については、今後の課題として考えてゆきたいと思う。

5. 結びにかえて：冠詞論への示唆

さて、以上の分析結果は冠詞論に対して、いかなる意味を持ち得るであろうか。発端から述べるなら、英語の定冠詞 the の使用が同定可能性 (identifiability) という概念によって特徴づけられるという説 (例えば、Huddleston and Pullum (2002: 368) など) があり、その説に対する関心から、我々は identify 「同定する」という語の研究に取り組むことにしたのであった。identify の示す過程が或る実在 (entity) に対して適用され得る場合であれば、その実在に言及する名詞には the が付け加えられる。その説は、概ねこのように理解することが出来るであろう。

ここで、identify の反意語リストをもう一度見直してみよう。それらの語句は、distinguish 「見分ける」、oppose 「対抗させる、対照させる」、separately perceive 「別々に知覚する」などである。これらの語句には、上で見たように、＜分離＞の意味があり、その点が＜仲介性＞などの特質を持つ identify と対立するのであった。本稿におけるこれまでの分析では、いわゆる概念的意味を中心に見てきたのであるが、ここで、いわゆる感情的意味などと呼ばれるものについて若干考えてみることにする。identify の反意語には、潜在的に＜分離＞の意味が伴う傾向があると本稿では考えている。そのことから連想されるのは、孤独や冷たさ、場合によっては、悲哀のようなものではないだろうか。確かに、これらのような感情的意味が全ての場合に感じ取られるとは限らないかも知れない。実際、「見分ける」、「異なった」、「対抗させる、対照させる」、「別々に知覚する」という概念について、使用の脈絡を抜きにして冷静に考えるならば、何らかの感情を伴うとは限らないようにも思われる。しかしそれでいて、文脈等の条件次第では、それらの概念は親しみとは逆の感情、つまり、ある種の孤独感のような冷たい感情を伴うという印象を与える場合がありえるのではないだろうか。一方、identify はそれらの概念とは反対の考えを表わすのであるから、一種の親しさのようなもの、即ち、親密であることや友好的であることなどを、感情的意味の一部に含んでいるのではないかと予想されるであろう。このことは、いわゆる、冠詞論における親和性 (familiarity) の概念を想起させるのではないだろうか。例えば、Huddleston and Pullum (2002: 368) は、(必要条件というわけではないが) 定冠詞の付いた名詞句に関しては、聞き手が指示対象に精通していると仮定され得る場合が多いという意味で、親和性という概念を、定冠詞の説明の為に用いている。感情的意味のレベルで、identify が＜親密＞という素性を備えているとすれば、identify からは familiar という語が連想しやすくなり、定冠詞の使用を説明する為に用いられる同定可能性 (identifiability) という概念も、親和性 (familiarity) という概念と結びつきやすくなると考えられるであろう。

既に論じてきたように、identify は [-分離] という素性によって特徴づけられ、また、＜仲介性＞という素性によってその特徴が記述される。

すなわち、identify が用いられる状況は、何らかの対象が或る対象と分離されることなく仲介されることによって（それらが同一であると）認められるような状況でなくてはならないであろう。その意味で、identify の示す過程が当てはめられるような対象（言い換えれば、同定されるべき対象）は、それと仲介されるべきもの（例えば、「同一視する」と訳されるような場合であれば、同一視の直接の対象となる存在が、それと同一性を持つものとして照合されるべき相手となるもの）が既に存在していることが前提されているであろう。例えば、或る人物 A 氏がもう 1 人の人物 B 氏の本人確認を行う状況を想定するならば、目の前の本人確認を行うべき人物 B 氏を、B 氏自身の身分証の写真に写っている人物 B' 氏と照合して、 $B = B'$ だということを確かめることになるであろう。このような仕方では、A 氏は B 氏の本人確認を行うのである。この例のように、identify という語は、identify の直接の対象となる実在（先の例では B 氏自身）と、それと仲介すべき実在（先の例では、〔それと〕照合すべき実在〔即ち、身分証の写真の人物 B' 氏〕）との間で、仲介（先の例では、照合）を行う過程に言及する為に用いられるものであると考えることが出来る。このように identify は、ある対象（〔行為・過程の〕直接の対象）と、それを仲介（照合）する相手となる対象の存在を前提している。identify が示す過程は、このように仲介の相手となる対象を前提しているという点で、既成の知識、情報に依存していると言える。以上の図式を冠詞論に応用すると、このような identify の語彙的意味特性は、定冠詞 the が既知の情報（given information）、旧情報（old information）を表わすという広く知られている定説と合致すると言えよう。もし、identify が素性 [+分離] を持つ動詞であるとすれば、それによって示される過程は既知の知識、情報から、ある意味で、分離、独立していることになるであろう。そのような場合、旧情報よりも、むしろ新情報を連想させることになるかもしれない。しかし、この仮定は事実と反するのであって、上の議論で見てきた通り、実際のところ、identify は [-分離] という素性を持つものと考えられる。したがって、identify の表わす概念は、新情報よりも、旧情報につながりやすい。このようなことなども、identify によって示される概念と同じものが、定

冠詞使用のメカニズムの基底にあって作用していることを示唆していると言えるのではないだろうか。

一方、identify の反意語が、[+分離] という素性を有していることを上の議論で見えてきた。このことを冠詞論に当てはめて考えてみよう。先に触れたように、ある対象を捉える際に、[+分離] で特徴づけられる仕方ですべてその対象を認識する場合、我々は一般に、(既知の情報を、一種の予備知識のようなものとして、ある程度参照することはあるだろうが) 主要な点については、その対象だけを独立して捉えることになるであろう。これは、機能主義の文法理論や談話文法における、新情報という概念を思い起こさせるであろう。identify も「識別する」と訳され、distinguish も「識別する」と訳される。この点で、両者は類似しており、同じ意味場の中に位置づけられることになる。しかし、identify によって示される過程が、他との共通性や類似性によって或る対象を捉える過程として理解されるのに対し、distinguish によって示される過程が、他との差異、相違によって或る対象を切り取るようにしながら、その対象を捉える過程であるということになるのではないかと推察される。前者は旧情報の把握ということを示唆しているように思われる。また、後者は新情報の把握ということを示しているように思われる。

このように、[-分離] によって特徴づけられる identify が、旧情報の標識と見なされる定冠詞と深くかかわっているという見方は、一定の合理性を持つと言えよう。とは言え、以上は、identify とその反意語の意味について概念分析を行った結果、示唆される事柄であって、冠詞使用の実例に基づいて実証されたものではない。今後の課題としては、定冠詞の実例分析を通して、本稿で得られた結果を補完的に検証することが重要であると考えている。

補注

1. *Oxford English Dictionary (OED)* における identify の記述

以下に、*Oxford English Dictionary (OED)* における identify の記述を引用しておくことにする。

- (i) 1. a. *trans.* To make identical (*with*, †*to* something) in thought or in reality; to consider, regard, or treat as the same.
- b. (*a*) To make one in interest, feeling, principle, action, etc. *with*; to associate inseparably. Chiefly *refl.* and *pass.* (*b*) **to identify oneself with**: *spec.*, to model oneself on, esp. unconsciously; to feel oneself to be associated with or part of; freq. *absol.* with ellipsis of the *refl.* pron. Also occas. *intr.*, to perform or undergo such a process with regard to something unspecified.
- †c. *intr.* To be made, become, or prove to be the same; to become one *with*. *Obs.*
2. a. To determine (something) to be the same with something conceived, known, asserted, etc.; to determine or establish the identity of; to ascertain or establish what a given thing or who a given person is; in *Nat. Hist.* to refer a specimen to its proper species.
- b. To serve as a means of identification for.
3. To discover, perceive; to localize. *colloq.*
Hence **i'dentifying ppl. a.**, that identifies.

(*OED, identify*)

1. a. 他動詞。(何かと、に) 思考において、あるいは、現実において、同一のものとすること。同一のものとして、考え、見なし、あるいは、扱うこと。
- b. (*a*) 関心、感情、主義、行動等、において、～と1つにすること。不可分に関係づけること。主として、再帰形、および、受動形で。(b) **to identify oneself with**: 具体的に、～を手本に

すること。特に、無意識に。自らが、～と関係づけられている、あるいは、～の一部であると感じること。しばしば、再帰代名詞の省略を伴って、**独立的に**。また、時に、**自動詞**。何か、不特定のあるものに関して、そのような過程を実行、あるいは、経験すること。

1c. **自動詞**。同じであると、される、なる、あるいは、判明すること。～と1つになること。**廢語**。

2. a. 考えられる、知られる、断言される、等のことをされた何かあるものごとと、(何かあるものごとが) 同じだと決定すること。～の正体 (identity) を決定する、あるいは、確証すること。一定の事物が何であるのか、あるいは、一定の人物が誰であるのかを確かめる、あるいは、確証すること。博物学では、ある標本をその種に帰すること。

b. ～のための identification (身元確認) の手段として役に立つこと。

3. 発見すること、知覚すること、特定の場所に範囲を限ること。**口語**。

したがって、i'dentifying 分詞形容詞。確認するところのもの。

(拙訳)

以上が *OED* における identify についての記述である (レイアウトは原文と若干異なる点がある。また、用例は省略している)。

2. *Concise Oxford English Dictionary (COD)* における identify の記述

Concise Oxford English Dictionary (COD) における identify についての記述を以下に引用しておく。

identify

1 establish the identity of. 2 recognize or select by analysis. 3 (identify someone/thing with) associate someone or something closely with. ➤

(**identify with**) regard oneself as sharing the same characteristics or thinking as (someone else).

(COD, p.707)

identify

1 ~の正体 (identity) を確証する。2 分析によって、認知する、あるいは、選び出す。3 (**identify someone/thing with**) 誰か、あるいは、何かを、~と密接に関係づける。▶ (**identify with**) 自分自身が、(誰か他の人) と同じ特徴、あるいは、考えを共有しているものと見なす。

(拙訳)

以上が、CODにおける identify についての記述である。

参考文献

荒木一雄・安井稔 (1992), 『現代英文法辞典』, 東京, 三省堂.

服部四郎 (1968), 「意味」, 服部四郎, 沢田允茂, 田島節夫 (eds.) 『岩波講座 哲学 XI 言語』, 東京, 岩波書店, pp. 283-338.

Huddleston and Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, Cambridge University Press.

白井賢一郎 (1985), 『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界—』, 東京, 産業図書.

鈴木孝夫 (1973), 『ことばと文化』, 東京, 岩波書店.

戸田正直, 阿部純一, 桃内佳雄, 往住彰文, (1986), 『認知科学入門—「知」の構造へのアプローチ—』, 東京, サイエンス社.

拙論 (2009a), 「用法間の相違と identify を特徴づけるもの—identify という語の意味 (1) —」, 『大阪学院大学 国際学論集』, 第20巻 1号, pp.147-171.

拙論 (2009b), 「Identify の類義語について—Identify という語の意味 (2) —」, 『大阪学院大学 国際学論集』, 第20巻 2号, pp.57-112.

使用テキスト

James, William (1995), *Pragmatism*, New York, Dover Publications, Inc.

Santayana, George (1998), *The Life of Reason*, New York, Prometheus Books.

ジェイムズ, W. 著, 榎田啓三郎 (訳) (1998), 『プラグマティズム』, 東京, 岩波書店.

辞書

Concise Oxford English Dictionary (COD), Eleventh Edition, Revised, Oxford, Oxford University Press, 2008.

Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE), New Edition, Pearson Education Limited, 2007.

The Oxford English Dictionary (OED), Second Edition, on CD-ROM, Version 3.1, Oxford, Oxford University Press, 2004.

Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD), Seventh edition, by Hornby, A.S., Oxford, Oxford University Press.